

対馬の闇IV

アジト

春日信彦

妹と後輩

10月5日（土）伊達は、クラブ・アリランの二階事務所で沢富を待っていた。というのも、瑞恵を紹介するためだった。午後8時過ぎ、事務所のドアにコツン、コツンと一定の間をおいて暗号のようなノックが2回響いた。沢富は、静かにドアを開き、笑顔を見せた。「先輩、お元気そうで、何よりです」沢富は挨拶すると小さな丸テーブルのパイプ椅子に腰かけた。「何が、お元気そうで。サワは、極楽トンボで、いいよな。俺は、毎日、モニターとにらめっこだ。目が痛くなる。まあ、それはいいとして、今日は、紹介したい人がいる。クラブの新人なんだが」沢富は、新人ホステスと何か打ち合わせでもする気にいるのだろうと察した。「へ～～、新人ですか。でも、ホステスとの打ち合わせは、ヤバイんじゃないですか？」

背もたれにのけぞって一度うなずいた。一呼吸置くと話し始めた。「まあ、そうなんだが、紹介したい新人は、亡くなった出口巡査長の妹だ」沢富は、出口巡査長の妹と聞いて、身を乗り出し、目を丸くした。「エ、妹ですか。マジですか？」伊達は、大きくうなずいた。「マジだ。俺も、こんな奇遇があるとは、驚いた。妹がいるとは、聞いていたが、まさか、ホステスとして、やってくるとはな～～」沢富は、あごを左手でゴシゴシとひっかくと尋ねた。「先輩、我々のことを話したんですか？それって、ヤバくないですか？たとえ、妹といえど、今回の捜査は、警察とヤクザ相手です。素人、しかも女性です。危険じゃないですか？」腕組みをした伊達が、うなずいた。「そうだ。サワの言う通り。彼女を仲間に入れるのは、非常に危険だ」

沢富は、身を乗り出した。「だったら、事件にかかわらないように忠告してください。我々だって、ヤバイんです。生きて、福岡に帰れるかどうか？」伊達は、ウ～～と大きなため息をついた。「俺も、最初は、そう考えて、事件にはかかわらないように、忠告したんだ。でもな～、彼女は、やわな女性じゃないんだ。単独で、仇を取る気なんだ。このままほっとけば、危険なことになるような気がしてな。それで、やむなく、素性を明かして、彼女の身を守ることにしたんだ。今も、悩んでいる。俺の判断は、間違っていたのか？サワ」サワもウ～～と大きなため息をついた。「そうでしたか。そんな勝気な女性でしたか。ひろ子さんみたいですね。困りましたね。後悔しても始まらない。素性をばらしたんでしょ。とにかく、彼女の身を守ってあげましょう」

伊達は、小さくうなずき話を続けた。「ところで、どうだ、何かつかめたか？そう簡単には、シッポを出すとは思えないが」しかめっ面になった沢富が返事した。「そうなんです。まったく、それらしき噂がないんです。それに、誰も、冗談一つ言わないんです。飲みを誘っても、断るんです。巡査とどうにか、約束したんですが、やってくるかどうか？」伊達は、警察内部にヤクザとつながっている人間がいるとにらんでいたが、聞き込みはかなり難航すると考えていた。「まあ、いい。焦っても、しょうがない。地道にやる以外ない。もうそろそろ、入店するはずだが」伊達は、腕時計を覗いた。同時に、階段を駆け上がってくる足音が響いてきた。コン、コンとノックの音がすると甲高い声が響いた。「みずえです」伊達は、即座に返事した。「入ってくれ」

ゆっくりとドアを開いた瑞恵は、ドアの隙間から顔をのぞかせた。そして、沢富の顔を見つめながらニコッと笑顔を作った。ちょっと間抜けな顔をした沢富を見て、瑞恵はほっとした。瑞恵は、やりてのエリート刑事と聞いていたため、偉そうにした強面の刑事を想像していた。瑞恵は、ちょっと安心したのか、笑顔を作ってお客の横にでも腰掛けるように沢富の横に腰掛けた。「始めまして、みずえです」沢富は、なれなれしい態度に、一瞬身を引いたが、即座に、あいさつした。「沢富と申します。こちらこそ」伊達が、ゴホン、ゴホン、と咳払いをして、話し始めた。「みずえさん、こちらは、北署の刑事です。我々の仲間の一人です。今日は、北署の巡査と飲む約束をしています。お相手をお願いします」瑞恵は、沢富の顔をじっと見つめうなずいた。「はい、了解です。巡査のクチを割らせるってことね」

女性刑事みたいな意気込みに、沢富は目を丸くした。「いや、まあ、そう、気負わなくて、今日が初めてですから。そう、みずえさんは、出口巡査長の妹さんだと聞きました。確かに不可解な事件でしたが、捜査は、我々刑事に任せてください。みずえさんは、知りえた情報を流していただければ、それで結構です。お気持ちは察しますが、無茶だけは、なされないように」瑞恵は、小さくうなずいたが、口元を引き締め返事した。「はい。警察に、ご迷惑をおかけするようなことは致しません。兄の仇は、私が、きつと、取って見せます」伊達は、ちょっと青ざめてしまった。「みずえさん、この前も言ったとおり、事件は警察に任せてください。もし、出口巡査長の死が、ヤクザとかかわりがいたら、とても危険です。我々の指示に従っていただかないと、みずえさんを守れなくなってしまいます。何度も言いますが、決して、単独行動はとらないように。いいですね」

沢富は、約束をした大野巡査のことが気にかかっていた。約束を忘れていないかどうか電話しようかと思ったが、彼を信じることにした。今のところ、彼からの情報が頼りだった。佐藤警部、安倍警部補、須賀巡査長らは、口裏を合わせたように、全く出口巡査長の事故死について話そうとしなかった。だが、大野巡査は、出口巡査長の死に納得がいかず、沢富の質問に快く答えていた。大野巡査にとって、出口巡査長は上対馬高校野球部の先輩であり、尊敬する先輩であった。また、彼は野球部の後輩ということで、出口巡査長にかわいがられていた。沢富がつぶやいた。「来てくれるといいのだが。大野巡査は出口巡査長の高校の後輩に当たるんです。それに、彼も、出口巡査長の死に疑問を持っているんです。彼なら、きっと、協力してくれると思っています」

伊達が、即座に口をはさんだ。「協力してくれるのは、大いに助かるが、捜査をしていることを上司に話すようなことはないだろうな。上司にヤクザの仲間がいたなら、我々の身が危ない。その点は、大丈夫なのか？」沢富は、真剣なまなざしで返事した。「彼は、口は堅いと思います。それに、出口巡査長の事故死について、捜査をしていることは、言っていません。あくまでも、参考までに、聞いていることにしています」じつと耳を傾けて話を聞いていた瑞恵は、大野と聞いて1年先輩の野球部の大野ではないかと思った。「大野巡査は、上対馬高校野球部の大野さんですか？その方だったら、知っています。私の1年先輩にあたります」伊達と沢富は、申し合わせたように瑞恵を見つめた。

沢富は、大きくうなずいた。「大野巡査は、上対馬高校野球部で、同じ野球部の先輩だった出口巡査長を尊敬していました。みずえさんも上対馬高校なんですか？」瑞恵は、笑顔でうなずいた。「はい、私は、テニス部でしたが、大野先輩は、野球部のエースで、イケメンだったので、女子にチョ～人気があったの。大野先輩に会えるんですか、ア～～ワクワクしちゃうな～」情報をとるには、都合のいい人間関係だとは思ったが、沢富は、瑞恵の警戒心の無さが気にかかった。瑞恵と大野巡査は、同じ上対馬高校卒ということであれば、情報は取りやすくなる。だが、瑞恵が安易にこちらの情報を流してしまうということも考えられる。瑞恵を信用してもいいものか、沢富は不安になってきた。「そうでしたか。大野巡査とは、話が弾みそうですね。でも、軽はずみな言動は、慎んでください。今回の捜査は、極秘捜査ですから」

沢富は、腕時計の時刻を確認すると伊達に話しかけた。「もうそろそろやってくる時間です。みずえさん、行きますか」伊達は、うなずき、瑞恵に声をかけた。「あまり気負わず、気楽に、いつものようにやってくれ」瑞恵は、うなずくと、沢富の左腕に手をまわした。「はい。しっかり、サービスてまいります。マスター」二人は階段を降りると瑞恵は一足先にクラブに入っていった。沢富は、大野巡査がやってくるのを入り口で待つことにした。9時を少し過ぎたころ、黄色のヤマネコタクシーが入り口前に止まった。しばらく待っていると心細そうな表情の大野巡査が後部座席から出てきた。約束通りきてくれたとほっとした。沢富は、笑顔で歓迎した。「来てくれたか。今日は、大いに飲もうじゃないか。好きなだけ飲んでくれ」大野巡査の背中を押すようにして、沢富はクラブに入っていった。

沢富がドアを開けると瑞恵の笑顔に歓迎された。「お待ちしていました。どうぞこちらへ」二人は右奥のテーブルに案内された。大野巡査が腰掛けると右横に瑞恵が腰掛けた。いつもならば、沢富にもホステスがつくのだったが、今回は、沢富だけが、大野巡査の前に腰掛けた。まずは、大野巡査を酔わせ、誘導尋問をすることになっていた。大野巡査は、瑞恵とは面識がないようで、顔をこわばらせ固まっていた。たとえ、高校時代に面識があったとしても、化粧をした瑞恵に気づくとは思えなかった。彼は、F大学卒業後、警察官になっている。年齢は、25歳。品行方正で上司の評価はまずまず。趣味は、草野球、ヤマネコファイターズのエース。本人が言うには、彼女は、現在のところいならしい。彼は、たまに、居酒屋には同僚と行くようだが、クラブは一度も行ったことがないと言っていた。ほとんどのクラブは、韓国人観光客のためにあるようなものだとも言っていた。どちらかというとお酒には弱いらしい。

三人が水割りを手に取るとカチンと軽くグラスを合わせた。大野巡査は、いつも飲むのはビールということで、ウイスキーはめったに飲まないということだった。そのためか、ほんの少し飲むだけで、おいしそうな表情を見せなかった。沢富は、気を使って声をかけた。「水割りより、ビールが良ければ、まずは、ビールにしますか？」大野巡査は、気の毒そうな顔つきになって、苦笑いしながら返事した。「いや、ウイスキーも焼酎もなんでも飲みます。ちょっと、緊張しちゃって」どうも、美人の瑞恵に緊張しているようだった。大野巡査は、どちらかというと言った。饒舌で冗談も通じるタイプだった。プロ野球は、ソフトバンクホークスのファンで、野球の話になると話が尽きなかった。彼もピッチャーであったためか、特に、千賀のファンで、千賀がいれば、優勝間違いなしとまで豪語していた。学生時代は、試合観戦だけでなく、ヤフオクドームでバイトしていたとのこと。

大野巡査の気持ちを和らげるためにホークスの話をすることにした。「大野君は、大のホークスファンだったね。日本シリーズ、行けそうかな～。今のところ、西武に分がいいようだけど」背筋を伸ばし目を輝かせた大野は、力強く返事した。「大丈夫。必ず、日本一になります。千賀がいるじゃないですか。頼りになるな～。沢富さんも、ホークスファンですよ」沢富は、かつては巨人ファンであったが、福岡に移ってきてからは、ホークスファンになっていた。「もちろんさ、ホークス日本一を願ってるさ。セリーグは、おそらく、巨人だろうから、日本シリーズは、ホークスと巨人の対戦だと思うよ」大きくなずいた大野は、腕組みをして返事した。「確かに。僕もそう思います。今回の巨人は、手ごわいな～。主砲の丸、坂本、がいますからね～。でも、きっと、勝ってくれます。打線の調子も上り調子だし、千賀と森でがっちり抑えてくれると思います。楽しみだな～」

楽しそうに話している二人に瑞恵も話しに割り込んできた。「そうよね、ホークスが日本一よね。私、工藤監督のファンなんです」目を丸くした大野が、瑞恵に返事した。「え、ホークスファンですか。うれしいな～。今日は、3人でホークス激励会をやりましょう。今日は、沢富さんのおごりだし、バンバン飲むぞ」大野をチラッと覗き見た瑞恵は、大野はかなりお調子者だと思えた。お酒が入れば、間違いなく口が軽くなると思い、ドンドンお酒を勧めることにした。「ホークス激励会。いいわね。野球って、男らしくて、いいわよね。工藤監督って、イケメンで、かわいいじゃない。好みなのよね、キュツとしちゃう。大野さんも野球をなされていたんですか？ちょっと、ピッチャーの高橋選手に似てるような。沢富さん、似てるよね」

さすがホステス、口が上手いと思った。小さくなずいた沢富は、笑顔で返事した。「そういえば、似てるよな～。大野君は、イケメンだし、もてるだろうな～。高校、大学と野球をやっていたんだろ。ファンレター、山ほどもらっていたんじゃないか？」苦笑いしながら大野は、返事した。「いや、まあ、子供のころから、プロにあこがれていたんです。ホークスに入るのが夢だったんですが、結果的には、夢で終わりました。でも、やるだけはやりましたから、悔いはありません」大野は、グイッとグラスを空けた。瑞恵は、話が盛り上がってきたと思い、高校時代の話をすることにした。「大野さんは、どちらの高校でしたか？私の知ってる方に、なんとなく似てるんです」大野は、瑞恵に顔を向けて返事した。「上対馬高校です」

ニコッと笑顔を作った瑞恵は返事した。「ということは、野球部の大野さんですね。私は、上対馬高校1年後輩で、テニス部でした。やっぱり、エースの大野さんでしたか。どこかで見たような、そんな気がしてたんです。対馬って、やっぱ、狭いところですね」大野は、上対馬高校の後輩に出くわしたことに目を丸くした。「へ～～、僕の後輩ですか。テニス部でしたか。僕を知っておられたとは、光栄です。今度赴任された須賀巡査長は上対馬高校野球部の先輩なんです。ほんと、対馬は狭いですね」沢富は、対馬は高校が3校しかない小さな島だから、同窓生に出くわすのは当然のように思えた。だが、ちょっと話を盛り上げることにした。「大野君、このくらいで驚くのはまだ早いぞ。瑞恵さんは、誰かに、似ているとは思わないか？」大野は、だれかとは芸能人だと思った。「そうですね～、なんとなく、すずに、似ているような」

ハハハ～と瑞恵は笑い声をあげた。「そんなに、お上手言わなくてもいいですよ」瑞恵は、水割りを作り大野に手渡した。沢富は、そういわれるとなんとなく似ているように思えたが、言いたいことはそういうことではなかった。出口巡査長に似ていることをほのめかしたのだった。「そうだな～、いや、そういわれると、みずえさん、すずに似てますよ。もっと似ている人がいると思うんだが。大野君、思いつかないかな～」大野は、しばらく考えてみたがこれといった芸能人が思い付かなかった。「そうですか～？すず以外にですか？いや、すずに似てますよ。それじゃ、沢富さんは、だれに似てるというんですか？」沢富は、この場でいうべきか迷ったが、はっきり言ったほうが、情報がとりやすいように思えた。「ほら、よく見てみたら、思い出さないか？君のよく知ってる人に」

大野は、右横の瑞恵の顔をまじまじと見つめた。ウ～～とうなずいたが、すず以外の顔は思い浮かばなかった。「いったい誰ですか？そうじらさなくてもいいじゃないですか？」沢富は、ちょっと気まずい表情で返事した。「驚くなよ。みずえさんの姓は、出口というんだ。これで、だれに似ているかわかっただろう」表情を引きつらせた大野は、背筋を伸ばし、返事した。「まさか、出口巡査長の妹さんですか？マジですか？」瑞恵は、ちいさくうなずいた。大野は、急に酔いがさめ、固まってしまった。「いや、失礼いたしました。先輩には、ご指導いただき、尊敬いたしておりました。僕としたことが」瑞恵が笑顔で返事した。「そう、気にしないでください。今日は、楽しく飲みましょう。さあ、飲んでください」

大野は、だらしのない自分をさらけ出しているようで気まづくなった。酔いが一気にさめ、酔える気持ちになれなくなった。「妹さんでしたか。先輩に妹さんがいるのは聞かされていました。それにしても、こんなところでお会いするとは」沢富は、気持ちを和らげることにした。「まあ、そう、固くならないで。今日は、飲もうじゃないか。出口巡査長は、のっぴきならない事故だったと思うよ。人には、運命というものがあると思うんだ。そう、みずえさん、すずくに似てるよな。大野君、好みのタイプじゃないのか？」大野の顔が真っ赤になった。「何言ってるんですか。まったく。からかわないでください」沢富は、追い打ちをかけた。「そうだ。大野君、今、彼女、いないって、言ってたじゃないか。付き合ったらどうだ。みずえさんも、彼氏いないらしいから」

大野は、あたりをキョロキョロ見回して話題を変えた。「まったく、冗談が過ぎますよ。いや、こんなところで言うことじゃないと思いますが。はっきり言って、先輩は、事故死じゃありません。僕が、きっと、仇をとって見せます。任せてください、みずえさん」大野巡査も事故死でないと確信していることに目を丸くした。瑞恵は質問した。「ということは、何か、心当たりがあるんですか？事故死ではないという。大野は、マジな顔つきで返事した。「事故って、どんな事故が、考えられるって、いうんですか？先輩は、対馬を知り尽くし、運動神経も抜群なんです。事故死なんて、考えられません。きっと、犯人がいるはずですよ。必ず、見つけ出して見せます。僕は、毎日、聞き込みをやっているんです。必ず、手掛かりを見つけてみます」

大野巡査が、そこまで出口巡査長の事故死を疑っているとは思っていなかった。沢富も事故死を疑っていたが、全く、手掛かりはつかめていなかった。殺害されていたとしても、今のところ、目撃者は現れていない。とにかく、地道に聞き込みをやって、目撃者を探し出す以外に解決方法はない。「ホ～、事故死じゃない。でも、だれ一人、目撃者がいないわけだから、まったく、難解な事件だ。大野君、何か手掛かりらしきものは、あるのか？」大野は、顔を左右に振った。「残念ですが、今のところは。でも、どこかに目撃者がいるように思えるんです。とにかく、これからも、聞き込みを続けるつもりです」沢富は、ちょっと、不安になった。万が一、ヤクザが絡んでいたとして、奴らが大野巡査の執念深い捜査を知ったなら、大野巡査は消される可能性がある。沢富は、大野巡査に何と言って捜査をやめさせるべきか悩んだ。

沢富は、一呼吸おいて論ずるように話し始めた。「確かに、出口巡査長の事故死には、疑問は残る。でも、この事件は、処理されたことだし、僕も、不慮の事故じゃないかと思っている。具体的にはわからないが、転落事故なのかもしれないし、もしかしたら、自殺かもしれない。大野君は、過去の事件にかかわらず、今の仕事に集中したほうがいい。出口巡査長もそう願ってると思うよ」大野は、黙ってうつむいていた。彼も悩んでいた。どんなに聞き込みをしても手掛かりがつかめず、途方に暮れていた。もう、あきらめたほうがいいのではないかと思い始めていた。心の底では、自殺ではないかと思いつつ、そうであってほしくないという思いが込み上げていた。もし、自殺だったら、その理由を知りたくもあった。なんども気持ちを切り替えようと試みてはみたが、どうしても、心は晴れなかった。

瑞恵も沢富の意見に賛成だった。万が一、ヤクザがらみで兄が殺されたのであれば、大野も同じように事故に見せかけられて殺される可能性がある。兄と同じ悲劇は、二度と起きてほしくなかった。「大野さん、沢富さんの言う通りよ。兄は、悩んでいたの。もしかしたら、自殺じゃないかと。だから、大野さんは、兄の事件のことは忘れて、将来のことを考えて。兄のことで、大野さんが上司にいらまれて、イジメにでもあったら、私、悲しい」大野は、みんなに迷惑をかけているように思えて、気の毒になってきた。この場は、二人の意見を呑むことにした。グラスを空けると一つうなずき返事した。「はい。わかりました。もうこれ以上、聞き込みは致しません。もし、自殺だったら、残念でなりません。できれば、ほんの少しでもいいから、相談してほしかった」両手を握りしめた大野は、ガクンとうなだれ、涙をこらえた。

今のところ、出口巡査長の謎の死の手掛かりは、全くなかったが、沢富は、偶然、見つかるような期待を持っていた。事故死か？自殺か？他殺か？まったく見当がつかなかったが、麻薬密輸捜査をきっかけに、何か、ヒントがつかめるような気がしていた。万が一、警察が麻薬密輸にかかわっていたなら、必ず、シッポを出すのにらんだ。北署か？南署か？沢富は、出口巡査長の死から、北署が怪しいとにらんでいた。しかし、今のところ、これといった不審な動きは見られなかった。湿った空気を感じた沢富は、話題を変えることにした。「大野君、みずえさんもホークスファンだし、今度、2人でホークスの試合観戦に行ってみてはどうだ。みずえさん、どうですか？」瑞恵は、うなずき返事した。「誘ってくだされば、喜んで」大野は、笑顔を作り、グラスを手を取った。

不気味な別荘

年老いたビーグル犬のビヨンド号は、ひろ子の実家で飼われることになった。ひろ子の父親は、4畳半の納戸をビヨンドの犬部屋にした。ビヨンドは高齢のため、日々の観察と介護を必要としていた。このことは、譲り受ける前から覚悟していたことだったが、ビヨンドの老衰はひろ子が思っていたよりひどかった。というのも、散歩に連れて行っても、ふらふらした歩きで、散歩に時間がかかるだけでなく、しばらく歩くと、寝込んでしまうのだった。麻薬探知犬であることから、散歩の途中でクンクンと鼻を利かせて、麻薬の匂いをかいでくれると期待していたにもかかわらず、全く、鼻を利かせるそぶりも見せなかった。天才麻薬探知犬として何度も表彰されたというビヨンドということで、念書まで書いて譲り受けたものの、いざ、飼ってみると世話のかかるただの老犬に過ぎなかった。

10月7日（月）非番だったひろ子は、いつものようにビヨンドをスイフトに乗せてさゆりの民宿近くの別荘周辺を散歩させたが、ちょっと歩いては、休憩していた。全くやる気のないビヨンドに、ひろ子はガックリしてしまった。やはり天才犬でも年を取れば、人間のように認知症になってアホになるのかと思い、譲り受けたことを後悔した。今日の午前中は、ちょっと暇ということで、ひろ子はビヨンドを連れて、さゆりに愚痴をこぼしに行くことにした。やせ細ったビヨンドを抱きかかえたひろ子は、後部座席の手提げバスケットにビヨンドを寝かせつけ、さゆりの民宿に向かった。民宿についたひろ子は、バスケットを提げて玄関に向かった。玄関では、是非、名犬ビヨンドを見たいと言っていたさゆりが、バスケットの中でしっかり目を閉じて寝ているビヨンドを見つめ、目を丸くして尋ねた。「どうしたの？病気？」

ひろ子は呆れた顔で返事した。「病気じゃないの。とにかく、やる気がないのよ。グ～たらなだけ。まったく、ア～～、もう、絶望。こんなはずじゃなかったのに」いったいどういうことなのか訳が分からなかったが、とにかく、二階で話を聞くことにした。二階に上がったひろ子は、しばらく、能天気な寝ているビヨンドを苦々しく見つめ、日当たりのいいベランダにバスケットをそっと置いた。中央のテーブルに戻ったひろ子は、さゆりを見つめ、ア～～ア～～と大きなため息をついた。さゆりは、いったい何があたのかと尋ねた。「どうしたのよ。そんなに落ち込んで。やっとの思いで、譲ってもらったビヨンドでしょ。ナニ、ため息なんかついてるのよ」ひろ子は、愚痴を言って恥をさらしたくなかったが、誰かに愚痴を聞いてもらわなければ、気が変になりそうだった。

ひろ子は、今にも息が絶えそうなか細い声で話し始めた。「もうダメ。まさか、こんなにアホだとは思わなかった。きっと認知症。何が、天才よ。まったく、役たたず。どうしてくれるのよ。念書まで書いて、頭まで下げて、もらってきたというのに、何よ、あの無様な姿。ア~~、当てが外れた。ア~~、もう死にたい。ビヨンドのアホタレ」ビヨンドは、数々の賞を受賞した名犬だと聞いていた。さゆりは名犬を見れるのを楽しみにしていたが、ビヨンドを認知症だとか、アホタレだとか、言って、いったいどういうことだろうかと思った。確かに、老犬だから、弱っているのはわかるが、犬の鼻は、そう簡単には、衰えない。ただ、元気がないだけで、麻薬の匂いを嗅げば、きっと、反応を示すと信じたかった。

ひろ子の態度は、ビヨンドに対し、あまりにも失礼だと思い意見をすることにした。「ひろ子、ちょっとビヨンドに失礼じゃない。認知症だとか、アホだとか、やる気がないだとか、言い過ぎよ。老犬なのよ。もっといたわってあげなよ。若かりし頃は、名犬としてバリバリ仕事をやっていたというじゃない。もっと、尊敬すべきじゃない」ひろ子は、もっともな話だとは思ったが、あのぐうたらな姿を見ると愚痴を言わずにはいられなかった。「いや、私が、バカだった。まさか、あそこまで、おいぼれだとは。もっと、確認すればよかったのよ。いったい、これからどうすればいいのよ。あれじゃ、そこいらの老いぼれ犬と同じじゃない。あ~~、夢も、希望も、すべて消え去った。神は、私を見捨てたのよ。今まで、信じてきた私は、バカだった」

確かに、ひろ子がビヨンドに大きな期待をかけていたことはわかっていたが、まだ、本当に認知症で、鼻が利かなくなったとは言い切れない。散歩をしているうちに、回復することだってありうる。あきらめるのは、まだ早いと言い聞かせることにした。「ひろ子、ビヨンドは名犬だったのよ。ちょっと、元気がないからといって、鼻が利かなくなったと決めつけるのは、ビヨンドに失礼よ。ビヨンドを信じてあげなよ。麻薬の匂いをかけば、きっと、反応して、教えてくれるから。ひろ子が、そんなようじゃ、ビヨンドは、ますます、へそを曲げて、そっぽむいちゃうんじゃない。これからじゃない。ビヨンドを信じるのよ」目じりを下げて、ひろ子は小さくうなずいた。「まあ、信じてあげるか。後悔しても始まらないし。どんなにジジ~~でも、かつては、名犬だったわけだし。マ、イツカ」

目を閉じてじっと耳を傾けていたビヨンドは、心ではムカついていたが、今の老いぼれた自分の姿を思えば、やむを得ないと心を落ち着けた。頭の中では、元気に走り回っていた自分の姿をありありと思い浮かべられたが、現実の自分は、ふらつきながら歩くのが精いっぱいであった。情けなくもあったが、年を取るということは、こういうことかとおつくづく身に染みて実感した。でも、鼻のほうは、まだ、まだ、現役時代と変わらない自信はあった。というのは、別荘の玄関あたりで、一度、ヘロインの匂いをほんの少し感じたからだ。後は、飼い主のパ～プリンが確かめるだけだ、と訴えたかった。目を覚まして、ワンと大きな声を出して、びっくりさせてやろうかと思ったが、ワンと叫ぶ元気もなかった。言いたい奴には、言わせておくと、空港内をはつらつと駆け回っている若かりし頃の夢の続きを見ることにした。

さゆりは、念のためにビヨンドの様子を確認した。「ビヨンドが元気がないのはわかったけど、散歩していて、何か変わった反応はなかったの？まったく、アホになったとは思えないんだけど」ひろ子は、沈んだ声で話し始めた。「そうね～～、いろんなとこ、散歩したんだけどね。北警の駐車場、釣り宿、民宿、比田勝港あたり、すぐそこの別荘。でも、ふらふら歩くだけで、ワンとも、スンとも、ワンとも。ちょっと歩いただけで、すぐ、休憩するんだから。やっぱ、ダメなんじゃない」さゆりは、うなずきながら聞いていたが、全く、何も反応がないということはないと思えた。必ず、どこかで、何か、反応を示すと信じたかった。「犬だからといって、ワン、ワンと吠えるとは限らないともうのよね。もう、年だし。何か変わった様子をしていたとか、いつもと違う動きをしたとか、何か、思い当たることはないの？」

ひろ子は、しばらく目を閉じて思い浮かべてみたが、これといった変わった様子は思い浮かばなかった。ただ、一つだけ困ったことがあった。この民宿の北にある洋風のバカでかい別荘の大きな門の前に来た時、門の真ん前で寝転がり、どんなに引っ張っても動こうとしなかった。困り果てて、抱えて車に乗せたことだった。「変わったことね～。あのジジ～～、ちょっと歩くと、すぐ休憩すんのよ。さっきも、ほら、あのバカでかい別荘の門の前で、ジジ～のヤツ、寝転がって、ガンとして動かなかつたのよ。しょうがないから、抱きかかえて、車に乗せてあげたのよ。まったく、ジジ～～は、困ったものよ。とにかく、どうしようもない認知症ね。もう、期待はしてないけど」さゆりはバカでかい別荘と聞いて胸騒ぎが起きた。というのは、一度、あの別荘に入っていくスモークのかかった黒いロールスロイスを見たからだ。そして、車から降りてくるサングラスをした人相の悪い人物を見たのだった。

あのバカでかい別荘は、2年前に建てられた。さゆりは、よりによってこんなにさみしいところに建てなくてもいいのにと思いつつ、時々、別荘を見学に行っていた。その別荘というのは、約1ヘクタールほどの敷地に、周囲の風景とは場違いの3階建ての豪華な洋館だった。そこには、広々とした芝生の庭。その中央には、純白のビーナスの噴水。5台は止められそうな大きな車庫。ふと、あのときの様子が頭に浮かんだ。大きな門が開いたと思うと、黒いロールスロイスがやってきた。門の陰から、そっと、玄関前に止まったその車を見ていると人相の悪い口ヒゲを生やした男性と貫禄のある中年の男性たちが、執事に案内されて、館の中に入っていった。さゆりは、この別荘の持ち主は、中国人か、韓国人ではないかと推測した。というのも、対馬の港周辺のあちこちが、韓国人、中国人に買収されていたからだった。また、ホテル、釣り宿、スナック、など、近年、韓国人経営者が急増していた。

さゆりは、もう一度、ビヨンドの様子を確認した。「ひろ子、さっきの話だけど、バカでかい別荘の話。大きな門の前でビヨンドが寝転がって動かなかったって言ってたじゃない。あの洋館の別荘は、かなりうさん臭いのよ。ビヨンドは、何か、合図を送ったんじゃないかしら」ひろ子は、あのバカでかい豪華な別荘を思い出していた。大企業の社長の別荘か、政治家の別荘のように思えた。「広々とした芝生の庭に、ビーナスの噴水。きっと、大企業の社長の別荘じゃない。うらやましいわ～～。一度でいいから、あの広々とした芝生を、かわいいプードルを引きつけて、散歩したいわ～～。執事に、お嬢様、足元に、お気をつけて、とか、言われちゃったりして。さゆりも、そう思わない」さゆりは、真剣なまなざしで、顔を左右に振った。「見たのよ。ロールスロイスから降りてくる、気持ち悪い人相の男たちを。きっと、あれは、ヤクザよ」

ヤクザと聞いて連想した。麻薬、金、武器の密輸。ビヨンドは、あの別荘の門のところで麻薬の匂いをかいだのでは？ひろ子は、出口巡査長の手紙を思い出した。車に麻薬を詰め込み、密輸していた。ならば、どこかに工作する場所がある。もしかしたら、その場所が、あのバカでかい別荘？「なるほど、ヤクザの別荘ね～。におうな～～。密輸の中継地点ということも考えられる。でも、ヤクザの別荘じゃ、手も足も出会えない。やはり、現行犯を捕まえないと」ひろ子の独り言を聴いていたさゆりが声をかけた。「何、ぶつぶつ言ってんのよ」我に返ったひろ子は、尋ねた。「ほら、人相の悪い男性を見たって言ったじゃない。そのほかに、気づいたことはない？どこかで見たような顔がいたとか？」さゆりは、左の人差し指を顎に当て思い浮かべた。「あ、あの顔。確か、あの時の警官の顔に似ていた」

ひろ子は、身を乗り出して確認した。「だれよ、似てる顔って。どこの警官。北署じゃない？」目をパチクリさせたさゆりは、うなずいた。「そう。3年前だったかな～。事故ってさ。北署に呼び出されたんだけど。その時のあの顔に似ているような」ひろ子は、せかした。「誰なの？しっかり思い出して。確かに警官なの？もう一度見れば、思い出すんじゃない」さゆりが心細そうな声で返事した。「まあ、なんとなくだけど。でも、他人の空似ってこともあるし。自信ないな～。そいじゃ、また、あの別荘に行ってみる。今度は、しっかり確認する」ひろ子は、もし、さゆりが見た人物が警察官であれば、そう簡単には出くわさないと思えた。それに、警察官であれば、変装していく可能性が高い。

ひろ子は、今度密輸する場合も、出口巡査長の場合と同じ手口だと確信していた。となれば、今度の新任の巡査長が、運び屋になる。彼を現行犯で逮捕しなければ、解決の糸口はつかめない。当然、上司が指示を出しているわけだし、上司は、ヤクザとつながっているはず。まずは、現行逮捕が先決。となれば、麻薬が積み込まれた車を発見すること。それには、ビヨンドの活躍が不可欠。でも、ビヨンドは、この体たらく。まったく、絶望的。あとは、神に祈り、ビヨンドの奇跡を信じる以外ない。出口巡査長の場合は、警部の、いや、警部補の車が、密輸に使われた。その車は、北署を出発し、厳原港から出港していた。警部の車は、レクサス、警部補の車は、クラウン、おそらく、どちらかの車が使われる。まだ、警部と警部補の自宅あたりを散歩していないことに気づいた。まずは、二人の自宅あたりを散歩することにした。

コーヒーを運んできたさゆりが声をかけた。「はい、どうぞ。ボケ～～と何考えてるのよ。ブルマンでも飲んで、すっきりしたら」ひろ子は、ブルマンの香りをかいだ。「いい香り。ブルマンって、高いんでしょ。儲かってるってことか。そいじゃ、ありがたくいただきます。「これは貰い物。自分では買えないわよ。9月、夫婦で利用された東京のお客様がいたの。そのお客からの頂き物。品のいい夫婦で、ご主人は公務員だといってた」ひろ子は、うわの空で聞いていた。ひろ子は、ビヨンドの寝姿を覗いたが、全く起きる気配がなかった。ビヨンドは、ヨボヨボのジジ～だが、さすが、名犬だと感心した。なんだか、幸運をもたらす奇跡の犬のように思えてきた。そして、ひろ子は、ビヨンドの寝顔に両手を合わせお辞儀した。

現金輸送

10月8日（火）午後8時50分、カツラ、眼鏡、ひげで変装した岸は、梅屋ホテル近くのマンションを出た。パンのポエム近くの道路沿いに立っていると約束の9時ちょうどにスモークがかかった黒いロールスロイスが目の前に泊まった。彼が後部座席に乗り込むと国道382を北上し、県道182に入ると鰐浦方面に走り続けた。港沿いを北上した車は、洋風の館の大きな門が開くと中へと進んだ。そして、車はビーナスを中心としたロータリを時計回りに旋回し、正面玄関で止まった。車が停まると執事が素早くドアを開け挨拶した。「ようこそいらっしゃいました。お待ちしております」彼は、20畳ほどあるリビングに案内されるとしばらく待たされた。ドアが開くとシュー社長の姿が現れた。シュー社長が丸テーブルの正面に腰掛けるとニコッと笑顔を作りあいさつした。「お元気そうで、何よりです。心配事でもおありですか？顔が固まっておられますよ」

岸は、奇数月に一回、この館にやってくる。だが、今日は突然の呼び出しだった。何か、自分に落ち度があったのではないかと内心ビクビクしていた。万が一、落ち度があったら、出口と同じ運命。あごを震わせしどろもどろで返事した。「いや。突然のお呼び出しだったもので。失礼いたしました」シュー社長は、しばらく黙っていた。静かにドアを開けた執事がコーヒーを運んできた。香ばしい香りのブルマンをテーブルにそっと置いた。「いい香りじゃないか。最高級のブルマンだぞ。1杯1万だ。日本で飲めるようなコーヒーじゃない。さあ」岸は、震える手でコーヒーカップをつかんだ。ガタガタと音を立ててしまった。ア、と声を出してしまったが、とにかく一口すすった。ほんの少し、気持ちが落ち着いた。固まった顔に笑顔を作り返事した。「最上級の香りとは味です。今日は、特別に、お招きいただき、光栄に思っております」

どうにか言葉を発したが、どんなことを言われるのだろうかと思うと震えが止まらなかった。しばらく俯いているとシュー社長が、静かに話し始めた。「今日お呼び出ししたのは、ちょっとお願いがありましてな」岸は、お願いと聞いて顔が真っ青になった。当然、お願いは、無理難題に決まっているからだ。岸は、恐る恐るそのお願いとやらを聞いた。「どのような？」シュー社長は、ブルマンの香りを嗅ぐとやさしそうな表情を作った。コーヒーカップを置くと話し始めた。「そう、大したことではない。現金を運んでもらいたい。ちょっと、庭を買いたくなってな。まあ、5億ほど、神戸まで、運んでほしい。クロネコヤマトじゃ、不安だし、お宅に、お願いするのが、もっとも、安全ですからな。お願いしてもよろしいかな」

5億となれば、スーツケース5個。誰に運ばせればいいのか？万が一、事故って警察に調べられたりしたら、一巻の終わりだ。だからといって、断るわけにはいかない。麻薬の次は、現金。いったい、俺たちを何だと思ってるんだ、と心で叫んだが、すでに多額の報酬を受け取った手前、笑顔で承諾する以外なかった。「はい。快くお受けいたします。ご準備いただければ、いつでも、お運びいたします」ニコツと笑顔を作ったシュー社長は、軽やかな声で返事した。「そうか。それは助かる。手違いということは、許されんぞ。まあ、わかってると思うが。まあ、君たちの仕事に落ち度は一度もない。ああ～、まあ、こちらに、ちょっとした落ち度はあったがな。でも、キリストのご加護に救われた」ワハハ～～とシュー社長は、笑い声をあげた。岸は、ちょっとした落ち度とは、出口巡査長のことだ、と直感できた。おそらく、彼の死は、奴らの仕業とにらんでいたが、キリストのご加護、とはどういう意味だろうとちょっと気になった。

シュー社長は、話を付け加えた。「現金と車の手配は、こちらでやる。ご希望の車があれば、言ってくれ。どんな車でも用意する。日程が決まり次第、追って連絡するが、来月運んでほしい。無事に届けてくれることを願う。よろしいか」真剣なまなざしになった岸は、うなずき返事した。「かしこまりました。こちらも、早速、打ち合わせを行い、待機いたします。お任せください」シュー社長は、大きくうなずき執事呼んだ。用件を聞いた執事は、部屋を出ていった。マジな顔つきのシュー社長は、岸に話しかけた。「今、ハン会長がお見えになる。岸さんにお会いしたいそうだ」中国マフィアの大親分の名を聞いて、少し緊張したが、かねがね、一度会ってみたいと思っていた。残虐極まりない北京大学卒の秀才という噂だった。岸は、しばらく待たされた。静かにドアが開くと背の高い、面長で白髪の老人が入ってきた。年齢は、70歳前後に見えたが、もっと年をいっているようにも思えた。

丸テーブルの東側に腰掛けたハン会長は、けだるそうな表情で話し始めた。「ちょっと、対馬によってみた。シューが別荘を建てたというもんだから。まずまずだな。ここは、目立たなくてよい。今後、役に立つ。君が、岸か？」岸は、即座に立ち上がり、あいさつした。「はい、対馬北警察署署長の岸と申します。今後とも、よろしく願いいたします」岸は、深々と頭を下げて、静かに腰を下ろした。「日本の警察は、アホばかりと思っていたが、君のような、賢いのもいるとは、頼もしい。今後も、使わせてもらおうぞ。ちょっと、小耳にはさんだんだが、最近、マトリがうろついているらしい。まあ、それは、そよ風みたいなものだ。こんな色気のないところじゃ、気が休まらんじゃろ。バーでゆっくりするがいい。シュー行こうか」シューは、即座に、執事呼んだ。ハン会長は、執事のお供で部屋を出ていった。

シュー社長は、岸に声をかけた。「それでは、我々もまいりますか」岸たちも執事に案内されて3階に上がった。この館は、3階建てだが、エレベーターがついている。ハン会長のためのものだった。ハン会長は、一足先にエレベーターでバーに向かっていた。この館は、思ったより部屋数が多いことを知った。シュー社長が言うには、一階は会議室、リビング、事務室、控室、など。二階は会長のためのVIPルーム、来客のための宿泊室。3階は遊技場となっていて、バー、ビリヤードルーム、コンパニオン控室、サウナ、などの部屋があるという。もっと、いろんな部屋があるようだが、気味が悪い館であることは間違いない。バーの入り口には、チャイナ服のコンパニオンが二人立っていた。バーの前の踊り場は、広々としていて高級クラブのフロアといったところ。シュー社長と岸が踊り場に現れると素早くコンパニオンは駆け寄り手を取って入口まで案内した。

バーの室内は、薄暗く、楕円形のソファーにハン会長を挟んでピンクのシルクドレスをまとったコンパニオンが10人ほど腰掛けていた。二人が、反対側のソファーにつくと新たにコンパニオンが現れ、それぞれにコンパニオンがついた。彼女たちは、中国語でハン会長に話しかけていたが、岸には、”ヨウコソ”と片言の日本語で語りかけてきた。この場では、ハン会長は、岸には何も話しかけてこなかったが、シュー社長が話を始めた。「すでに、ホテル、別荘、病院、食品加工工場、などのための土地買収をやっている。さらに、ゴルフ場建設のための土地買収を計画している。いずれは、対馬の港周辺のほとんどを買収するつもりだ。そうすれば、治外法権同然となる。君たちも安心して仕事ができというものだ。もう少しの辛抱だ。頑張ってくれたまえ」中国マフィアの買収はうわさには聞いていたが、このままいけば、日本全土が中国マフィアに買収されてしまうように思えた。

当然、マフィアといえば、麻薬売買とカジノが主な収入源だが、日本にカジノができれば、大手を振ってマフィアが乗り込んでくることになる。そうなれば、警察も完全に買収されて、無法地帯となる。すでに、国会議員は、マフィアに買収され、彼らの指示で動いている。日本のヤクザは、おそらく、マフィアの傘下に入ることになるだろう。国土と国会議員がマフィアに買収されてしまえば、もはや、日本ではなくなってしまう。いったい、日本はどうなってしまうのか？これからの日本を考えると背筋が凍り付いてしまった。岸の心にも罪悪感があったが、もはや、彼らにあらがうことはできなかった。おそらく、神戸に運ぶ5億円も土地買収の資金に違いない。シュー社長の買収話からすると今後も、度々、現金輸送を任せられることが予測できた。いずれカジノができれば、警察は、マネーロンダリングのための現金運び屋にされてしまう。

ハン会長のハーレムを目の当たりにして、世界はマフィアに牛耳られてしまったと実感した。かつては、CIAがマフィアを利用して暴利をむさぼっていたが、今では逆に、マフィアがCIAを利用して暴利をむさぼっている。もはや、米国はマフィアのドル箱となり、ロシア政府も中国政府もマフィアの子分になってしまった。このままでは、羊のような国民は、マフィアに食べ物にされ、殺人娯楽の餌食になってしまう。現に、原発の甘い味を覚えたマフィアは、日本を原発国家にして、世界の核廃棄物処理場になっている。内部被曝で苦しみ、犬死していく日本人を見て笑っているに違いない。これが日本の運命だと割り切ってみたが、心の底から、さみしさがあふれ出た。眠たそうな表情でハン会長は、意味不明の中国語でコンパニオンと会話していたが、しばらくするとコンパニオンに介助されるようにして部屋を出ていった。

その姿を見たシュー社長が、素早く立ち上がるとハン会長のもとに駆け寄っていった。何やら中国語で挨拶するとハン会長に深々と頭を下げてホッとした表情で戻ってきた。「岸君、汗を流すとするか。酔ってはないと思うが、気分は大丈夫か？」岸は、ハン会長のハーレムに圧倒されてアルコールが喉を通らなかった。笑顔で軽やかな声で返事した。「はい。盛大な歓迎に、感謝申し上げます」シュー社長は、コンパニオンに声をかけた。笑顔でうなずいた2人のコンパニオンは岸の手を取ってバーの東側にある別室に案内した。別室に案内されると即座に脱衣室に案内され、服を脱がされた。広々とした浴室には、大きな湯舟とその横には6畳ほどもあるマットが敷かれてあった。仰向けに寝かされた岸は、ぼんやりと天井を見つめていた。二人のコンパニオンは、岸の体にシャボンを丁寧に塗り込み、やさしく洗うようにマッサージし始めた。

明日は、勤務であるため帰宅する予定だったが、朝早くに送り届けるといわれ、宿泊の歓迎を受けることになった。案内された2階の部屋は、1泊100万もするような豪華なスイートルームで、二人のコンパニオン付きのベッドであった。早朝、5時にロールスロイスで送り届けられた岸は、キッチンでコーヒーを飲みながら、現金輸送の運転手を誰にすべきかを思案し始めた。一人は、警部補の安倍、もう一人はだれにするか？須賀巡查長か？大野巡查か？須賀巡查長には、重要な任務がある。となれば、やはり、使いやすい大野巡查が適任か？安倍警部補と打ち合わせをやって、彼の意見を聞いてみるか。5億円ともなれば、5個のスーツケースの運搬になる。万が一、検問にあっても、車内を調べられないような車となれば……。そんな車はあるか？肉運搬の冷凍車はどうか？スーツケースを覆い隠すように肉を詰め込めば、怪しまれない。これは名案か。

青春の思い出

10月9日（水）寝床のひろ子は、台風19号接近のニュースにおびえていた。今回は、関東、東北ルートということで九州北部の災害は免れそうだったが、それでも、台風の影響はあるとみていた。台風18号では、佐賀に甚大な被害があり、対馬も港の船は被害を受けた。そのことを考えると、ますます目がさえてしまい、眠りにつけなかった。眠りにつけないと、いつものように、麻薬密輸のことを考え始めた。一番の悩みは、いかにして現行犯を逮捕するかだった。仮に、警部のレクサスもしくは警部補のクラウンが、福岡に向かうことが判明した場合、誰がその車を尾行するかだった。ひろ子自身が尾行するには、危険が大きすぎる。かといって、だれに頼めばいいか？ 沢富か？ 伊達か？ 沢富は、北署勤務だから、ちょっと無理っぽい。となれば、伊達。伊達到尾行を依頼するにも、ある程度の根拠が必要になる。単に、あの車には麻薬が詰め込んであるといっても信用されるわけがない。尾行する車は、警察の車だ。

とにかく、尾行は伊達にお願いするとして、福岡行の情報をどうやって入手するか。須賀巡查長は、新任だから、情報をとるにもきっかけがない。大野巡查は、須賀巡查長の後輩だから、情報をとれなくもない。でも、彼にお願いできるほど親しくはない。彼と打ち解けるためのきっかけが必要。大野巡查を知っている人物は？ さゆりは知っているだろうか？ 大野巡查は、上対馬高校の後輩であっても、4年も後輩。もしかしたら、出口巡查長の妹が知っているかもしれない。彼女も上対馬高校。彼と同級ではないにしても、知っている可能性はある。そう、彼女は、テニス部の後輩のはず。確か、出口が言っていた。妹がひろ子と同じテニス部に入ったと。でも、彼女は、福岡で働いていると母親は言っていた。母親に彼女の電話番号を聞いて、連絡を取る以外ない。もし、大野巡查を知っていれば、彼女を通じて大野巡查に接近できる。

非番の明日、早速、ひろ子は、母親に会うことにした。母親の携帯番号を聞いていなかったため、午前中に団地に行くことにした。10月10日（木）愛車のスズキスイスポで団地に向かった。団地の部屋番号と場所は覚えていたが、その部屋の名札の名前が違っていた。そこの現住人に尋ねたが、前住人のことは知らなかった。母親は、どこに引っ越したのか？ とりあえず、母親が務めている特別養護老人施設で尋ねることにした。運良く、母親は勤務中だった。しばらく、休憩時間まで、玄関のロビーで待つことにした。11時過ぎ、来客があることを知らされた母親が駆けてロビーに現れた。仕事が、忙しいと見えて、そわそわした様子だった。「あら、ひろ子さん。お久しぶり。今日は何の用ですか。今、忙しくて、2、3分しか、話ができないんですが」

ひろ子は、恐縮してしまい、早速、出口の妹の電話番号を聴くことにした。「突然、お呼び出ししたりして、申し訳ありません。娘さんの電話番号を教えてくださいませんか？ちょっと、尋ねたいことがあって」母親は、突然、笑顔を作った。「みずえですか。今、対馬に戻ってきているんです。電話番号ですね、携帯見ればわかります」母親は、スマホの携帯番号をひろ子に見せた。ひろ子は、素早く、自分のスマホに打ち込んだ。「お仕事でしよ。申し訳ありませんでした」母親は、ニコニコと笑顔を輝かせて返事した。「みずえったら、対馬で暮らすって言うてくれたんです。今、二人で暮らしているんです。そう、是非、遊びにいらしてください。いつでも歓迎します」ひろ子も幸運が巡ってきたようでうれしくなった。「はい、近いうちに。お仕事、申し訳ありませんでした。お仕事に戻ってください。助かりました。失礼します」

小走りに車に戻ったひろ子は、運転席に飛び込むと瑞恵に電話した。2回の呼び出しで応答があった。「はい、みずえです」ひろ子は、即座に返事した。「突然電話してごめんなさい。出口君と同級のひろ子です。今、時間いいですか」瑞恵は、カラオケ女王だとわかり、元気よく返事した。「カラオケ女王のひろ子さんですね。私に、何か？」ひろ子は、ぜひ会いたいと伝えた。「今日でなくてもいいんだけど、お話ししたいことであって、会えないかしら」木曜日は、非番だったため、今日会えることを伝えた。「今日でもいいですよ。非番ですから」ひろ子は、甲高い声で返事した。「そう、ラッキー。それじゃ、今から、うかがってもいい？今、お母さんに、会って来たところなの。老人施設にいるんだけど、自宅はどこ？」瑞恵は、マンションの住所を伝えた。ひろ子は、ナビに住所を打ち込み、アクセルを吹かせた。

マンションは、比田勝の十八銀行近くだった。走って、20分もすると到着した。303号を呼び出すと自動ドアが開いた。303のインターホンを押すとドアが開き、瑞恵の甲高い声が響いた。「キャ〜ひろ子さん、本物ね。上がってください。さあ、どうぞ。キッチンでいいですか？私って、片付けが苦手で、散らかってるんです」ひろ子は、笑顔で返事した。「いいですとも。こんなに歓迎されるとは、光栄です。最近、対馬に戻ってこられたと、お母さんに聞きました。お母さん、喜んでおられましたよ」瑞恵は、お茶をテーブルにセットするとひろ子の正面に腰掛けた。「そうですか。兄が、亡くなったもので、戻ってきたんです。母、一人にするわけにいかないし。運良く、クラブの仕事もあったし。マンションも手ごろなのがつて、運が良かったです。それに、ちょっと、やりたいこともあったし」

ひろ子は、早速、大野巡査のことを聴くことにした。「話は変わるんだけど、北署に、大野と言う巡査がいるの。上対馬高校の後輩なんだけど、みずえさん、彼と面識ある？同級生？」瑞恵は、即座に返事した。「一つ先輩。野球部の大野さんでしょ。知ってますよ。エースで、女子にチョ～～人気があったんです。それがなにか？」ひろ子は、話を続けた。「ちょっと、話したいことがあるのよ。でも、全く、面識がなくて。紹介してほしいの。できる？」先日あったばかりで親しくはなかったが、紹介はできると思えた。「大野巡査とは、親しいって程ではないんですが、先日、沢富さんという方とお店に来られました。大野巡査は、兄ととても親しくしていたみたいで、とても、誠実な方でした」これは、グッドタイミングと心で手を打った。「そ～～、なんてついてるんだろう。ぜひ、紹介して。できる限り早めに」先日、瑞恵は、大野巡査の電話番号を聞いていた。

午後5時以降だったら、電話しても問題ないように思えた。「今は、勤務中だから、5時以降に、電話してみます。ひろ子さんが、お会いしたい、と伝えればいいんですか？」ひろ子は、うなずき、返事した。「出口巡査長のことで、ちょっと聞きたいことがあるって、伝えて」瑞恵は、うなずいたが、どんなことを聴きたいのだろうかと関心がわいた。「兄について何を聞かかたいんですか？大野巡査は、兄のことは、何も知らないといっていました。突然の事故死で、びっくりしたといっていました。ひろ子さんは、兄のクラスメイトですよ。兄について、何か知ってることがあれば、教えてください。私は、兄の死に、納得がいけないんです。確かに、悩んでいたみたいですが。何かの事件に巻き込まれたんでしょうか？何でもいいんです、教えてください」

悩んでいた、と聞いて、瑞恵はどんなことを知っているのかと興味がわいてきた。出口巡査長は、自分のことをどこまで、妹に話していたのか？ひろ子は、瑞恵からも情報が得られるような気になった。「出口君、野球部の監督が言うには、何か、悩んでみたいなのよね。でも、どんなことで悩んでいたかまではね～。気を悪くしないでよ。もしかしたら、自殺じゃないか？とも思えるの。でも、出口君は、自殺するようなやわじゃないと思うし。ひょっとして、後輩の大野君に何か話していなかったかと思ってね」瑞恵も、一時は、自殺じゃないかと思った。でも、どうしても、納得がいかなかった。「兄は、悩んでいました。理由は聞いていません。自殺だったかもしれません。でも、信じたくないんです。兄は、逃げるような、卑怯者じゃないんです。きっと、何かの事件に巻き込まれて、殺されたに違いないんです。きっと、犯人を見つけ出して、仇を討ちます。絶対に」瑞恵は、両手で顔を覆い、ア～～と泣き声を上げた。

ひろ子は、瑞恵が自分と同じことを考えていることに驚いた。誰が考えても、出口巡査長の死は、単なる不慮の事故死ではない。麻薬の運び屋をやってしまったという出口の懺悔から考えて、自殺の可能性はあるが、口封じとして、他殺の可能性も十分ある。なのに、警察は、単なる事故として、あつけなく処理した。この点も、納得がいかなかった。出口の仇をとるには、麻薬密輸の現行犯を逮捕する以外にない。そのためには、どうしても、内部情報が不可欠。「みずえさん、悲しんでばかりいてもしょうがない。出口君は、何かの事件に巻き込まれたと思う。その何かを、突き止めなくては。そうでしょ。元気を出して。一緒に、仇を取ろう」仇と聞いた瑞恵は、涙を拭いた。目を吊り上げた瑞恵は、力強く返事した。「ひろ子さん、協力してくれるんですね。絶対、仇を取ってやる。仇をとるには、どうすればいいんですか？何ができるんですか？」

ひろ子は、冷静さを保ち、返事した。「出口君の事件には、ヤクザがかかわっているかもしれない。そうなれば、軽はずみな聞き込みは危険。私に、考えがあるの。今は、私を信じて、じっと待っていて。単独行動は、絶対ダメよ。わかった」瑞恵は、伊達マスターと同じことを言われ、やはり、兄の死には、何か恐ろしい闇があるように感じられた。「はい。ひろ子さんを信じます。でも、何かお手伝いさせてください」ひろ子は、うなずいた。「ありがとう。大野巡査との面会后、やってもらいたいことがあれば、願います。とにかく、大野巡査と会うことが先決。連絡が取れたら、私に電話するように伝えてくれる」瑞恵は、敵討ちをあきらめていたが、神のご加護で、奇跡の逆襲の機会を与えていただいたような心持になった。「5時を過ぎたら、大野巡査に電話します。そして、そのように伝えます」

ひろ子は、ひとまず帰って、連絡を待つことにした。「それじゃ、お願い。帰るわね」瑞恵は、もう帰るのかとがっかりした。対馬に戻ってきたばかりで、話し相手がいなくてさみしかった。「え、もう、帰っちゃうんですか。もうちょっと、いいじゃないですか。ケーキがあるんです。食べていってください」ケーキと聞いた途端、腰が動かなくなった。ダイエット中で甘いものを絶っていたが、もう、我慢の限界に来ていた。「ケーキ、食べたいけど、ダイエット中なのよね」瑞恵は、悪いことを言ったと気の毒そうに返事した。「ダイエット中でしたか。それじゃ、もう一杯、お茶を飲んで行ってください。対馬に戻ったばかりでしょ、話し相手がいらないんです。いいでしょ、もう少し」ひろ子は、ケーキが頭から離れなくなっていた。「そうね、ちょっとぐらいなら」瑞恵は、お茶の準備を始めた。

ひろ子は、瑞恵に声をかけた。「お茶じゃなく、コーヒーがいいんだけど」瑞恵は、即座に返事した。「コーヒーですね。ブレンドしかありませんが、それでいいですか？」ひろ子は、うなずき、付け加えた。「コーヒーには、ケーキよね。ケーキってどんなの？」瑞恵は、笑顔で返事した。「レアチーズケーキです。すごく、おいしいんです。これだったら、少しぐらい、いいんじゃないですか？」ヨダレをたらしそうになったが、ぐっところえて、冷静に返事した。「少しぐらいだったら、いいかもね。いただくわ」瑞恵は、フレッジからレアチーズケーキを取り出し、小皿に乗せて差し出した。「コーヒー淹れますから、もうちょっと待っていてください」今のひろ子にとって、レアチーズケーキは、ビーフステーキを目の前にして、マテを言われた犬の気持ちと同じだった。今にも、ヨダレがこぼれ落ちそうだった。我慢していると、気が変になりそうだった。

瑞恵は、丁寧にお湯を注ぎ、ゆっくりとコーヒーを淹れた。ひろ子は、こんなに時間が遅く感じられたことはなかった。手に震えが起きていた。これは、ケーキ麻薬が切れた禁断症状の現れに違いないと感じた。コーヒーを差し出した瑞恵は、声をかけた。「コーヒーを淹れるの得意じゃないんです。イマイチ、センスがないんです。どうぞ」ひろ子は、コーヒーなど、どうでもよかった。一気にかぶりつきたかったが、グッと我慢して小さなフォークを手にとった。手の震えがますますひどくなっていた。ガタガタと小皿で音を立ててしまった。びっくりした瑞恵は、声をかけた。「ひろ子さん、大丈夫ですか？気分でも、悪いんですか？」ひろ子は固まっていた。なんと返事していいか、頭が混乱していた。「ハ、ア～、いや、別に。ほら、ダイエット中だから、ちょっと緊張しちゃって。ケーキ食べるの、半年ぶり」手の震えは、収まらなかった。

ひろ子は、一度、フォークを小皿に置いた。そして、大きく深呼吸して、神に、心の中で懺悔した。「私は、意志の弱い、情けない、女です。ケーキ麻薬がやめられない、ゲスの女です。地獄に落とされてもいい、最低の女です。こんな女をお許しく下さりますか？いや、神を侮辱するようなことを、シャ～シャ～とほざくとは、情けなくて、自殺したい思いです。でも、いましばらく、ご猶予をください。出口の仇を討った暁には、神に愚かな身をささげ申し上げます。お許しく下さい、マリア様」自己満足の懺悔を終えたひろ子は、フォークを手にした。震えは止まっていた。ひろ子は、自分のことを最低のカトリック信者と思ったが、口からも目からもヨダレが出ていた。「いただきます」ひろ子は、麻薬患者が麻薬を手に入れたように、ケーキを口に放り込んでいった。

無言でケーキをむさぼり食べるひろ子を見て、いったい何が起きたのだろうとじっと見つめていた。精魂込めて淹れたコーヒーを一口もすすらず、ひたすら口をモグモグさせていた。「ひろ子さん、おいしいですか？」もはや、ひろ子の耳に入る言葉はなかった。ひろ子は、ケーキでできた宇宙の中で、宇宙遊泳をしていた。食べ終わったひろ子は、我に返ったが、ケーキ麻薬の恍惚感に浸っていた。頭は、真っ白になっていた。瑞恵は、声をかけ続けた。「ひろ子さん、ひろ子さん」誰かが自分を呼んでいる声に気が付いた。「え、何か言った？」瑞恵は、コーヒーに目をやった。「コーヒー冷えますよ」ひろ子は、天を仰ぎ、神にお許しを乞うた。「愚かな迷える子羊をお許してください。また、神に背いてしまいました。地獄に落としてください」ひろ子は、コーヒーを手に取り、一口すすった。「もう、死んでもいい。すっごくおいしかった」

瑞恵は、ダイエットで無理をして、拒食症になり、入院した人を知っていた。「ひろ子さん、あまり無理をしないほうがいいんじゃないですか？いいじゃないですか、ちょっと太ったぐらい。私は、もう、ダイエットやめました。食べすぎはよくないけど、我慢しすぎても体に悪いそうです。一緒に、太りましょうよ」太るという言葉聞いて、真っ青になった。我慢しすぎは、体に良くないことは知っていたが、太りたくもなかった。「我慢しすぎは、よくないわね。でも、ダメな女。こんな女、地獄に落ちるわね」地獄と聞いて、ちょっと重病じゃないかと思えた。「ケーキを食べて、地獄に落ちるんだったら、この世の女性は、すべて、地獄行きじゃないですか。もっと、気楽にいきましょうよ」ひろ子のダイエットは、何回やっても失敗していた。でも、太る体質のひろ子にとって、甘いものは禁物だった。

へこんでしまったひろ子は、小さな声で返事した。「やっぱし、ダメだったか。無理をして、体を壊してもよくないし。みずえさんの言葉に甘えて、気楽に行くとすっか」ワハハ〜とひろ子は、笑い声をあげた。瑞恵もワハハ〜と笑い声をあげた。「いいじゃないですか。一度の人生、能天気に行きましょうよ。ところで、ひろ子さんは、福岡じゃなかったんですか？いつから、対馬に？」ひろ子の場合、事情が複雑で説明に困った。とりあえず、適当に返事した。「何とか、知り合いの関係で、1年だけ、対馬に戻ることになったのよ。まあ、そんなとこ」1年だけと聞いて、がっかりしてしまった。「1年ですか。ということは、来春には、福岡ってことですね。本当は、私も、福岡が良かったんですが、そうもいかなくて。でも、ひろ子さんに会えて、元気が出てきました。兄の分まで、対馬で親孝行します」

時刻は午後1時を過ぎていた。ひろ子は、立ち上がり挨拶した。「もう、こんな時間。ケーキ、ごちそうさまでした。帰らないと」瑞恵は、またもや、引き留めた。「お昼、まだでしょ。一緒に食べましょうよ。いつも、一人なんです。彼氏、いないし。いいでしょ。何か、急ぎの用でもあるんですか？」ひろ子は、即座に返事した。「別に、ないけど」瑞恵が、ポンと手を打って笑顔で返事した。「何、食べます。お寿司、取りましようか？すぐ近くに、お寿司屋があるんです。よく、取るんです」ケーキの次は、お寿司じゃ、図々しいように思えたが、帰って一人で食べるのも味気ないと思い、この際、お言葉に甘えることにした。「そお、それじゃ、いただきますから」瑞恵は、即座に、出前の注文を取った。「30分くらいかかるそうです。そうだ、アルバム持ってきますね」瑞恵は、自分の部屋にかけていった。両手に分厚いアルバムをもって笑顔で戻ってくると、ひろ子の右横にポンと置いた。

瑞恵は、アルバムをはさむように腰掛け、アルバムを開いた。そこには、マウンドに立っている出口巡査長のユニフォーム姿が写った。瑞恵は、寂しそうに話し始めた。「これ、お兄ちゃん。かっこよかったな～。写真見ると、死んだのが嘘みたい。お兄ちゃんをつぶやきが聞こえてくるんです。」よし。抑えてやる。任せとけ”って。今でも、信じられない」ひろ子も写真を見ていると出口の死が嘘のように思えた。突然、オ～～、と叫んで、ドカ～～と開けたドアから、浅黒い出口の顔が現れるような思いがした。「そうね、エースだったな～。かっこよかった」ページを繰ると、ひろ子のユニフォーム姿が現れた。ひろ子は、叫んだ。「え、これって、私じゃない。なんで、こんなに」瑞恵も最初見た時、ひろ子のたくさんの写真にびっくりした。「お兄ちゃんたら、ひろ子さんのファンだったみたい。うわさに聞いたんだけど、ひろ子さんのペア、ビューティーペア、って言われていたんでしょ」

ひろ子は、出口に盗撮の趣味があるとは夢にも思わなかった。男子は、見かけによらず、ドエッチだと思った。「ちょっと、これって、盗撮じゃない。いやね～。まったく」瑞恵は、クスクス笑い始めた。「男子って、こんなものよ。いいじゃないですか。男子に人気があって。お兄ちゃんは、ひろ子さんが好きだったのよ。こんなにたくさん、よく撮ったものね」瑞恵は、ハハハハハ～～と大声で笑った。ひろ子は、恥ずかしくなったが、部活の写真に改めて見入ってしまった。というのも、部活の写真は、部員の集合写真しか持っていなかったからだ。特に見入ったのは、県大会ベスト8の数枚の写真だった。その試合は、最終ゲームまでもつれて、ひろ子のスマッシュがアウトになり、ゲームセット。ベスト4進出はならなかった。さゆりと抱き合っていて泣いている姿の写真に見入っていると、あの県大会での大事件を思い出した。

ひろ子は、泣き崩れている二人の写真を指差し、つぶやいた。「この試合の時、大事件が起きたの」大事件と聞いた瑞恵は、身を乗り出した。「え、大事件ですか？どんな？」大事件といっても噴き出すような事件だった。「聞きたい？まったく、バカげた事件よ。聞いたら、大笑いするから」そこまで言われたら聞かすにはいられなかった。「聞かせてくださいよ。もったいぶらなくても、いいじゃないですか？」ひろ子は、高校時代を思い出していた。「みずえさんは、中学生だったから、覚えてないかもね。出口君のズル休み」瑞恵は、思い出せなかった。「ズル休みなんか、してないと思うけど」ひろ子は、瑞恵の顔を見つめ話し始めた。「それが、大問題になったズル休みなよ。話せば、ちょっと長くなるんだけど、いい思い出だから話すね」瑞恵は、目を輝かせてひろ子を見つめた。ひろ子は、脳裏のスクリーンにコートを駆け回る青春時代を映し出した。

ひろ子は、一呼吸置くと話し始めた。「私のペアは、県大会に出たのよ。その会場は、佐世保市の総合グラウンドだったの。結果は、奇跡的にベスト8に入ってね。それは、うれしいことだったんだけど、この試合の応援に来ていた、とんでもない野球部の3人組がいたのよ。その中の一人が、出口よ。出口から後になって話を聞いたんだけど、そもそも、言い出しっぺは、長嶋っていう金持ちのヤンキーみたいなやつ。ビューティーペアの応援に行こうと言い出したんだって。出口は、旅費がかかるから、行かないと言ったらしいんだけど、お金の心配はしなくていい、俺のオヤジが出してくれるから、って言って、出口は誘いに乗ったらしいの。月曜の早朝、親には朝練があると言って家を出て、3人は、長嶋のオヤジのお抱え運転手に乗せてもらって、空港に行ったらしいの。そう、長嶋のオヤジは、市会議員の議長とってた」

面白くなってきた話に何度もうなずき瑞恵は、聞き入っていた。「お兄ちゃんも、いい加減なやつね」ひろ子は、ニコッと笑顔を作って、話を続けた。「応援に来てくれたのはいいけど、ズル休みじゃない。それが、誰かにチクられて、ばれたのよ。それからが、大変よ。教頭は、カンカンになって、野球部は何をやってるんだ。3人は、停学処分にする、と武田監督に言い放ったのよ。監督も仮病を使ったのは、よくないと思っただけだけど、応援に行ったことは、悪くはないと思っただけなの。それで、監督は、停学処分はひどすぎると思い、嘘をついて、この場を切り抜けたの。なんと、監督自らが、応援に行くように指示した、って言っただけなのよ。そうならば、監督が責任を取らなければならないでしょ。監督は、自分が責任を取ります。監督をやめます、と言い放ったんだって。教頭は、嘘を言っているとわかっていても、監督自ら、責任を取るといわれれば、教頭まで、責任問題になるじゃない。結局、停学処分は、取り消されたんだって」

瑞恵は、目をパチクリさせて、うなずいていた。「ということは、お兄ちゃんが、警察官になれたのは、武田監督のおかげってことね。停学にでもなっていたら、警官になれなかったかも」ひろ子は、大きくうなずき、返事した。「そうなのよ。その時、監督は、生徒の将来のことを考えたと思うの。停学ってことになれば、その生徒は、不良というレッテルを張られるじゃない。それでは、就職に不利になると考えたのよ。さすが、武田監督ね」瑞恵は、何度もうなずき、感心したような表情で返事した。「武田監督って、顔は、アホみたいだけど、すごい人なんだね。教師のかがみってやつね。青春ドラマの教師みたいね」ひろ子は、ワハハ〜と笑い声をあげた。「武田監督のおかげで、警官になれたようなものかもしれないけど、警官にならなければ、死ななくてもよかったかも。なんだか、出口って、運のないやつ」

突然、呼び出し音がした。瑞恵は、飛び上がって、返事に向かった。しばらくして、インターホンが鳴ると瑞恵は玄関にかけていき、出前を受け取った。「ひろ子さん、やっと食べられますよ。さあ、どうぞ」盛り合わせの寿司をテーブルに置いた。お腹がすいていた二人は、あっという間に、3人前をたいらげた。ご馳走になって、さっさと帰るのは、気が引けたが、帰宅することにした。「今度は、私が、おごるから。もう帰らないと。長居しちゃって、ごめんね」瑞恵は、顔を左右に振った。「とんでもない、ひろ子さんとお話しできて、気持ちがすっきりしました。また、是非、遊びに来てください」ひろ子は、自宅のマンションに戻り、大野巡査からの電話を待った。

スパイ

大野巡査と連絡を取ったひろ子は、10月13日（日）ひろ子の実家で会う約束をした。というのも、大野が、是非、ビヨンドを見たいと言ったからだ。約束の午後2時少し前に、大野巡査はシルバーのスズキアルトに乗ってやってきた。出迎えたひろ子は、早速、ビヨンドのいる犬部屋に案内した。「この犬、ビーグルの麻薬探知犬。若いころは、バリバリの名犬だったらしいけど、今は、認知症になって、ご覧の通り。いつも、寝てばかり。世話は、父がしてくれてるから、安心。父は、犬が大好きなのよ。だから、飼うことにしたの」大野も、犬が大好きだった。たとえば、老犬でも、麻薬探知犬と聞いて、ぜひ見たいと言ったのだ。「かなり弱ってるみたいですね。年なんでしょうかね。でも、どうして、こんな老犬を」ひろ子は、苦笑いして、話を濁した。「ちょっと、訳があつてね。お茶でも入れるわね。キッチンに行きましょう。母も姉も出かけてるから、気兼ねしなくていいわよ」二人は、キッチンに向かった。

お茶を出したひろ子は、大野の前に腰掛けた。ひろ子は、一呼吸おいて話し始めた。「今日は、大野巡査にお願いしたいことがあつてね。そう、沢富さんという方がいるでしょ。彼ね、知り合いなの。黙っていて、ごめんね。彼も、もうしばらくしたら、来るはず」大野は、沢富警部補の知り合いと聞いて、緊張してしまった。「え、お知り合いなんですか？まさか、ひろ子さんも、デカってことはないでしょうね」ひろ子は、クスクスと小さな笑い声をあげた。「デカって顔じゃないでしょ。ただのタクシー運転手。沢富さんとは、福岡で知り合ったの。早速、お願いなんだけど」大野は、即座に、口をはさんだ。「お願いされても、できることと、できないことがあります。あまり期待しないでください」

ひろ子は、小さくうなずき話を続けた。「お願いというのは、ちょっとした、スパイをやってほしいの。近々、警部のレクサスカ、警部補のクラウンが福岡に行くはずなのよ。運転手は、おそらく、須賀巡査長のはず。そこで、福岡に行く日時を知らせてほしいの。当然、巡査長は、極秘で福岡に向かうはず。だから、うまく、巡査長から情報を取ってほしいの。やってもらえる？」大野は、顔をしかめた。極秘で行くようなことを部下に話すはずがない。無理なお願いだと思えた。「ちょっと待ってください。巡査長は、極秘に福岡に行くわけですよ。そんな極秘事項を部下に漏らすはずがないじゃないですか。無理です。僕にはできません」

頑なな断りに一瞬ひるんでしまったが、ひろ子は、食い下がった。「それはわかっているのよ。無理を承知でお願いしてるの。とにかく、やってほしいの。これは、出口巡査長の事故死にかかわっている可能性があるの。お願い、やるだけ、やってみて」出口巡査長の事故死にかかわっていると聞いて、理由を知りたくなった。「どういことですか？どんなかわりが、あるっていうんですか？納得のいく説明を聞けば、考えてもいいです」ひろ子は、車に麻薬が詰め込まれているとは言えなかった。そんなことを言えば、どこからそんな情報を得たかを聞かれるに違いなかったからだ。「理由といっても、そう、出口巡査長も、何度かクラウンで福岡に行ったみたいなの。だから、福岡行が、事件にかかわっているんじゃないかと思ったの」大野は、首をかしげて悩んでる様子だった。「そういわれても、どうやって聞き出せばいいんですか？極秘事項を部下になんか話しませんよ」

ひろ子は、とにかく食い下がることにした。「須賀巡査長と大野巡査は、野球部の先輩後輩でしょ。だったら、話すきっかけも作れるんじゃない。お酒を飲みながら、レクサス、クラウンの話を持ち出して、聞き出すとか？男同士の話ってあるんじゃない。やってくれない。大野巡査にしか、頼める人はいないのよ。お願い、やって。この通り」ひろ子は、両手を合わせて、頭を下げた。大野巡査は、たとえ引き受けたとしても極秘情報入手できる自信がなかった。「そう、お願いされてもですね～。ムリなものはムリですよ。それに、須賀巡査長は、お酒飲まないし。趣味は、野球と最近始めたゴルフって言ってましたから。そんなに、福岡行を知りたいければ、厳原港で毎日車をチェックされたらいいじゃないですか、一台一台。レクサスとクラウンの車番はわかっていることだし。それがいいですよ」

確かに、毎日、一台一台チェックすればいいかもしれないが、現実的に無理だと思えた。いったい、だれがそんな大変なことをやるの、と言いたかった。今、現実的にやれることは、大野巡査の情報収集だと訴えたかった。「でも、毎日、一台一台チェックするなんて、そんなこと、現実的に無理じゃない。お願い、とにかく、やってよ。それじゃ、ゴルフに誘って、ラウンドしながら、情報を聞き出すってのはどう？意外と、うまくいくかもよ。やってみてよ。ダメもとでいいから」大野巡査は、ゴルフといわれても、打ちっぱなしにも行ったこともなく、ゴルフクラブも持っていなかった。これこそ、無理な話だと思った。「あのですね～、ゴルフが趣味なのは、須賀巡査長であって、僕ではありません。僕は、一度も、ゴルフをやったこともないし、ゴルフクラブも持っていません。そんな、無茶なことを言わないでください。だから、ムリって言うてんじゃないですか。まったく、ひろ子さんも、しつこいですね」

この程度の抵抗で引き下がるひろ子ではなかった。「だったら、ゴルフを始めればいいじゃない。クラブは、こっちで用意するから。そうだ、沢富さんね、下手の横好きらしくて、打ちっぱなしには、何度か行ったことがあるって言ってた。三人で、打ちっぱなしに行ったらいいじゃない。ワイワイ、ヘタクソ同士で話しているうちに、情報が取れるかも。これは、名案。沢富さんが、来たら、お願いしてあげるから。いいでしょ」大野巡査もここまでしつこくされると根負けしてしまった。「わかりました。ちゃんと、ゴルフクラブを用意してくれるんですね。沢富警部補も一緒ならいいです。沢富警部補に、情報収集頼みますから。ベテランなんだし、僕より、上手だと思いますよ。最初から、沢富警部補に頼めばよかったんですよ」ひろ子は、大野巡査の機嫌を損ねたようでちょっと気まずくなった。

野球部の先輩後輩だからこそ、話が弾むことを強調した。「そう、言わないでよ。さっきも言ったように、野球部の先輩後輩だからこそ、腹を割って話せるってことがあるじゃない。そこを期待してお願いしてるのよ。へそを曲げず、協力してよ。もし協力してくれたら、大野巡査の出世を約束するから。嘘じゃない」調子のいいことを言って、利用しようとしていることに腹が立った。「また、また、そんな、おだてに乗りませんよ。ひろ子さんに、どんな力があるっていうんです。県警本部に親戚でもいるんですか？」ひろ子は、そう具体的に問い詰められると困ってしまった。「親戚はいないけど。警察庁に知り合いがいるのよ。嘘じゃない。信じて」これ以上、ひろ子と口論したくなかった。出口巡査長の事件解明に役立つのなら、引き受けてもいいと思った。「わかりました。とにかくやってみます。でも、期待しないでください。無理と思いますから」

真っ赤になった大野巡査の顔をまじまじと見ていると、ピンポン、ピンポンというインターホンの音が響いてきた。ひろ子は、助け舟がやってきたとホッとした。「沢富さんだわ」ひろ子は、即座に、玄関にかけていった。ひろ子は、沢富に話の経過をかいつまんで話した。話を聞いた沢富は、笑顔でキッチンにやってきた。「よ～、大野巡査。頼りになるとは聞いていたが、やってくれるそうじゃないか。さすが、男の中の男だ。野球部のエース」ちょっと、お世辞を言われた大野は、照れくさそうに返事した。「いや、まあ、やってみますけど、期待しないでください。沢富さんも一緒に、打ちっぱなしに行ってくれるんでしょうね。僕は、やったことがないんですから」沢富は、うなずき返事した。「もちろんさ。クラブも貸してあげるし、打ちっぱなしの料金も払ってあげるさ。大野君は、須賀君と気持ちよく、遊んでもらえばいい」

沢富の言葉を聞いて、少しは、ホッとした。おそらく、極秘情報の入手は、無理だとは思っていたが、協力すれば、何かいいことができるように思えた。「沢富警部補、協力するからには、将来のこと頼みますよ。ひろ子さんが、出世を約束してくれたんですから」ちょっと、ムキになって念を押した。沢富は、うなずき、快く返事した。「わかってるさ。来春には、僕は、警察庁に戻る。でも、長崎県警本部には、君のことを持ち上げておくから。協力頼む」大野巡査は、沢富警部補の今の言葉を聞いて、未来が開けた心持になった。「よっしゃ~。任せてください。須賀巡査長は、野球部の先輩です。きっと、僕にだったら、話してくれるような気がしてきました。ところで、沢富警部補は、ひろ子さんとは、どういうご関係で？」沢富は、ちょっと気まずそうな表情でひろ子を見つめた。ひろ子は、この際、二人の関係を打ち明けたほうが、より信用されるような気になった。

ひろ子が、ニコツと笑顔を作って話し始めた。「実は、付き合ってるの。そういう関係」大野巡査は、そうではないかと直感していた。「やっぱり。そうじゃないかと思っていました。なんとなく。そうか、ひろ子さんは、沢富警部補の転勤に、ついてこられたってわけですね。それじゃ、近々、ご結婚ですね。いいよな~、僕も、結婚したいな~」ひろ子は、瑞恵の気持ちを伝えることにした。「あら、大野さんも彼女がいるじゃないですか。隠さなくてもいいのに」大野巡査は、激しく顔を左右に振った。「ナニ、言ってるんです。僕なんか、彼女はできません。女性は、苦手なんです。沢富警部補に、ゴルフより、女性の口説き方を習いたいくらいです。あ~~、僕は、ダメな男なんです」ひろ子が、間髪入れずに返事した。「近くにいるんじゃないの？ほら、みずえさん。お似合いだと思うけど」

瑞恵とは、先日あったばかりで、彼女ではなかった。「何言ってるんですか。みずえさんとは、先日、初めて会ったにすぎません。彼女ではないですよ。みずえさんが、怒りますよ」ひろ子は、ワハハ~と笑い声をあげた。「何言ってるのよ。一度会えば、十分なのよ。女心ってそういうもの。アタックしたら。きっと、うまくいくから。男なら、ド~~ンと押してみないと。エースでしょ。みずえさん、大野さんを待っているから。女の直感は、当たるんだから」そういわれりと単純な大野巡査は、マジに受け取ってしまった。「そうですか。それじゃ、ひろ子さんの言葉を信じて、アタックしてみます。沢富警部補、こっちのほうも、協力してくださいよ」沢富は、大きくうなずき、笑顔で返事した。「よっしゃー！大船に乗った気持ちで、みずえさんに、アタックするがいい」大野巡査の能天気な脳裏のスクリーンには、バージンロードを厳かに歩く、純白のウエディングドレスをまとった新婦と腕を組んだタキシードの新郎の姿が、映し出されていた。